

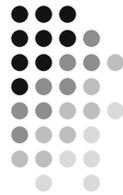
数理計画法 第8回

第3章 非線形計画

3.1 非線形計画法の基礎

3.2 制約なし最適化

担当: 塩浦昭義
 (情報科学研究科 助教授)
 shioura@dais.is.tohoku.ac.jp



復習: 非線形計画問題の分類

制約なし最適化問題

入力: 目的関数 $f(x)$ のみ

$$\text{最小化 } f(x) \quad \text{条件なし } (x \in \mathbb{R}^n)$$

制約つき最適化問題

入力: 目的関数 $f(x)$

および制約を表す関数 $g_i(x)$ ($i = 1, 2, \dots, m$)

$$\text{最小化 } f(x) \quad \text{条件 } g_i(x) \leq 0 \quad (i = 1, 2, \dots, m)$$

この講義では、制約なし問題を主に扱う



復習: 勾配ベクトル

関数 f の勾配ベクトル

$$\nabla f(x) = \begin{pmatrix} \frac{\partial f}{\partial x_1} \\ \vdots \\ \frac{\partial f}{\partial x_n} \end{pmatrix}$$

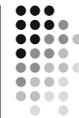
一変数関数の場合は $\nabla f(x) = f'(x)$

例:

$$f_1(x) = x^2 \implies \nabla f_1(x) = 2x$$

$$f_2(x_1, x_2) = \sin x_1 + \cos x_2$$

$$\implies \nabla f_2(x) = \begin{pmatrix} \cos x_1 \\ -\sin x_2 \end{pmatrix}$$



勾配ベクトルとテイラー展開 [p.89]

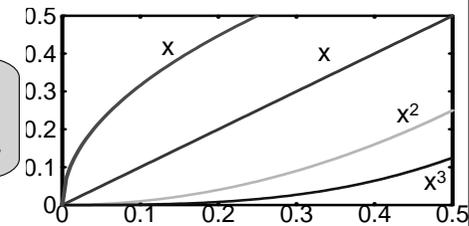
関数 f は勾配ベクトルを傾きとする線形関数により
 近似できる

(一次の)テイラー展開

$$f(x+d) = f(x) + \nabla f(x)^T d + o(\|d\|)$$

記号 $o(\cdot)$: 0 のときに $g(\cdot)/\cdot \rightarrow 0$ となる関数 $g(\cdot)$ を表す。

x^2, x^3 など、
 より速く 0 に
 近づく関数を表す



勾配ベクトルとテイラー展開 [p.89]



$$f(x+d) = f(x) + \nabla f(x)^T d + o(\|d\|)$$

例: 線形関数の場合 $f(x) = a^T x + b$

$$\nabla f(x) = a$$

$$\begin{aligned} \longrightarrow f(x+d) &= a^T (x+d) + b \\ &= f(x) + \nabla f(x)^T d \end{aligned}$$

テイラー展開はもとの関数に一致

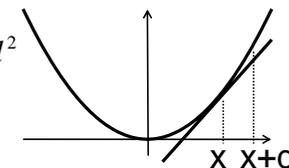
勾配ベクトルとテイラー展開 [p.89]



$$f(x+d) = f(x) + \nabla f(x)^T d + o(\|d\|)$$

例: $f_1(x) = x^2$ $\nabla f_1(x) = 2x$

$$\begin{aligned} f_1(x+d) &= (x+d)^2 = x^2 + (2x)d + d^2 \\ &= x^2 + (2x)d + o(|d|) \end{aligned}$$



関数 f を点 x において線形関数で近似

$(x+d)^2$ と $x^2 + 2xd$ の誤差 - $|d|$ が小さければ十分小さい

勾配ベクトルの性質 [p.89]



勾配ベクトルの方向に進むと関数値が増える

性質: 任意の x に対し、 $\nabla f(x) \neq 0$ ならば
十分小さい $\varepsilon > 0$ に対して $f(x + \varepsilon \nabla f(x)) > f(x)$

証明: $\delta = \varepsilon / \|\nabla f(x)\|$, $d = \delta \nabla f(x)$ とおく (ε : 正の数)

$$\begin{aligned} \text{テイラー展開より } f(x+d) &= f(x) + \nabla f(x)^T d + o(\|d\|) \\ &= f(x) + \varepsilon \|\nabla f(x)\| + o(\varepsilon) \end{aligned}$$

正数 ε を十分小さくする $\longrightarrow \frac{o(\varepsilon)}{\varepsilon}$ は 0 に近い値

$$\varepsilon \|\nabla f(x)\| + o(\varepsilon) = \varepsilon \left(\|\nabla f(x)\| + \frac{o(\varepsilon)}{\varepsilon} \right) > 0$$

$$\therefore f(x+d) > f(x)$$

勾配ベクトルの性質 (続き) [p.89]



勾配ベクトルと逆の方向に進むと関数値が減る

性質: 任意の x に対し、 $\nabla f(x) \neq 0$ ならば
十分小さい $\varepsilon > 0$ に対して $f(x - \varepsilon \nabla f(x)) < f(x)$

証明: $\delta = \varepsilon / \|\nabla f(x)\|$, $d = -\delta \nabla f(x)$ とおく (ε : 正の数)

$$\begin{aligned} \text{テイラー展開より } f(x+d) &= f(x) + \nabla f(x)^T d + o(\|d\|) \\ &= f(x) - \varepsilon \|\nabla f(x)\| + o(\varepsilon) \end{aligned}$$

正数 ε を十分小さくする $\longrightarrow \frac{o(\varepsilon)}{\varepsilon}$ は 0 に近い値

$$-\varepsilon \|\nabla f(x)\| + o(\varepsilon) = \varepsilon \left(-\|\nabla f(x)\| + \frac{o(\varepsilon)}{\varepsilon} \right) < 0$$

$$\therefore f(x+d) < f(x)$$

制約なし問題の最適性条件 [p.97]

制約なし最適化問題： 最小化 $f(x)$

最適性条件: ベクトル x が非線形計画問題の最適解であるための必要条件

定理 (制約なし最適化問題の最適性条件):
 x^* : 制約なし問題の最適解 $f(x^*) = 0$

証明: $f(x^*) = 0$ と仮定

勾配ベクトルの性質より、十分小さい $\delta > 0$ に対して
 $f(x^* - \delta \nabla f(x^*)) < f(x^*)$

x^* が最適解であることに矛盾 $f(x^*) = 0$

制約なし問題の最適性条件 [p.97]

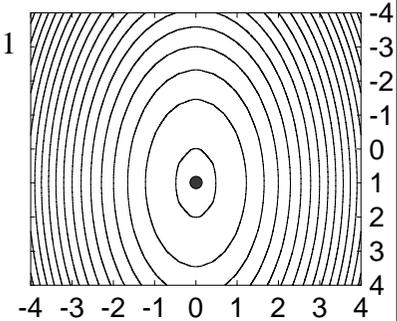
定理 (制約なし最適化問題の最適性条件):
 x^* : 制約なし問題の最適解 $f(x^*) = 0$

例: $f(x) = x_1^2 - 2x_1 + 4x_2^2$
 $= (x_1 - 1)^2 + 4x_2^2 - 1$

$(x_1, x_2) = (1, 0)$ が最適解

$$\nabla f(x) = \begin{pmatrix} 2x_1 - 2 \\ 8x_2 \end{pmatrix}$$

$$\nabla f(1, 0) = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$



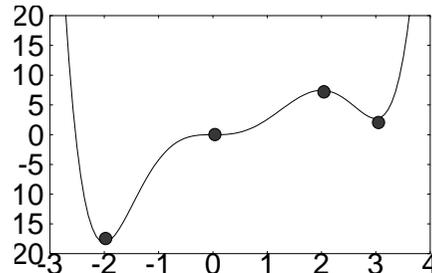
停留点 [p.98]

定義: x は停留点 $f'(x) = 0$

「 x^* は停留点 x^* は最適解」は必ずしも成り立たない

例:
 $f(x) = \frac{1}{6}x^6 - \frac{3}{5}x^5 - x^4 + 4x^3$ $\nabla f(x) = (x+2)x^2(x-2)(x-3)$

停留点は $x = -2, 0, 2, 3$
 最適解は $x = -2$ のみ



極小解、極大解、鞍点 [p.99]

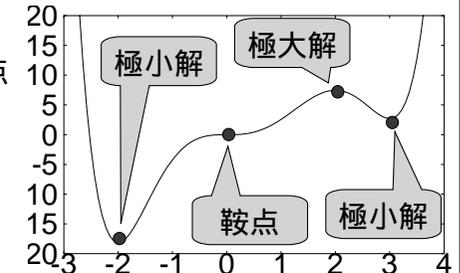
停留点 x^* の分類

極小解: x^* の付近だけに注目したとき、 x^* は最小

ある $\epsilon > 0$ が存在して、 $\|x - x^*\| < \epsilon$ を満たすすべての x に対して $f(x) \geq f(x^*)$

極大解: x^* の付近だけに注目したとき、 x^* は最大

鞍点: 極小点でも
 極大点でもない停留点



制約なし問題の解法1:最急降下法 [p.102]

最急降下法のアイデア:
勾配ベクトルと逆の方向に進むと関数値が減る

現在の点 x を $x - \text{ステップサイズ} \cdot \nabla f(x)$ により更新
関数値 $f(x)$ を減らしていく

ステップサイズ

ステップサイズの選び方:
次の一変数最適化問題を(近似的に)解く
最小化 $f(x - \text{ステップサイズ} \cdot \nabla f(x))$ 条件 $\text{ステップサイズ} > 0$

直線探索と呼ばれる

最急降下法の実行例 [p.103]

教科書の例3.2,3.8: $f(x) = x_1^2 - 2x_1 + 4x_2^2$

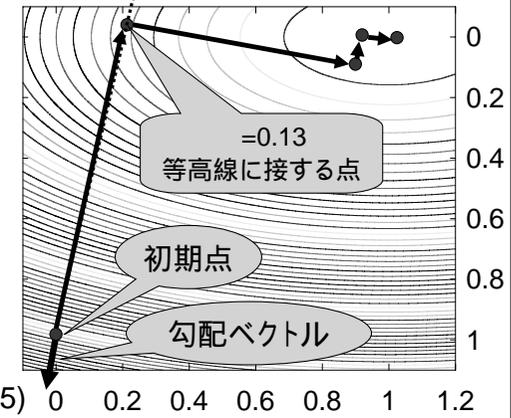
$$\nabla f(x) = \begin{pmatrix} 2x_1 - 2 \\ 8x_2 \end{pmatrix}$$

• $(x_1, x_2) = (0, 1)$ から
スタート

• $f(0, 1) = (-2, 8)$

• $f(0 + 2, 1 - 8)$
を最小にするのは
 $= 0.13$

• 次の点は
 $(x_1, x_2) = (0.26, -0.05)$



最急降下法のアルゴリズム [p.102]

入力: 関数 f とその勾配ベクトル ∇f
初期点 x^0

ステップ0: $k=0$ とする

ステップ1: x^k が最適解に十分近ければ終了

ステップ2: 最急降下方向 $-\nabla f(x^k)$ を計算

ステップ3: 直線探索問題

最小化 $f(x^k - \text{ステップサイズ} \cdot \nabla f(x^k))$ 条件 $\text{ステップサイズ} > 0$
を解き、解を x^{k+1} とする

ステップ4: $x^{k+1} = x^k - \text{ステップサイズ} \cdot \nabla f(x^k)$ とおく

ステップ5: $k=k+1$ として、ステップ1に戻る

最適解の判定 [p.104,105]

• 非線形計画問題では
最適解を正確に求めることは困難

⇒ 最適解に十分近い解(近似最適解)を求める

例: $f(x) = x^4 - 4x^2$

この関数を最小にする x は $0, \pm 2$

無理数をコンピュータで表現することは不可能

• 最適解に十分近いことをどうやって判定する?

(方法1) 最適解 x^* に対し $\|f(x)\| = 0$ が成り立つ

⇒ $\|f(x)\|$ の値が十分小さくなったら終了

(方法2) 最適解の近くでは x^k があまり変化しない

⇒ $\|x^{k+1} - x^k\|$ の値が十分小さくなったら終了

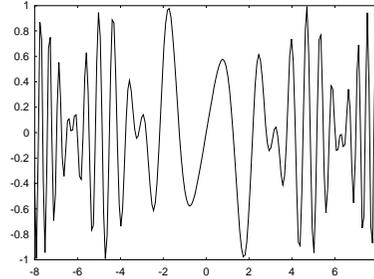
最適解の判定 (つづき) [p.104,105]

- 非線形計画問題では
近似最適解すら求めることが困難なことが多い



極小解または停留点を
求めることで我慢する

- 極小解は良い解であることが多い
- ある種の非線形関数では
極小解 最小解



定理: ある仮定の下では,
最急降下法の求める点列は停留点に収束する

ヘッセ行列 [p.90]

関数 f のヘッセ行列

$$Hf(x) = \begin{pmatrix} \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_1} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_2} & \cdots & \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_n} \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_1} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_2} & \cdots & \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x_n \partial x_1} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_n \partial x_2} & \cdots & \frac{\partial^2 f}{\partial x_n \partial x_n} \end{pmatrix}$$

一変数関数の場合は2階導関数に一致

$$Hf(x) = f''(x)$$

ヘッセ行列 (続き) [p.89]

例: $f_1(x) = x^2 \implies \nabla f_1(x) = 2x \implies Hf_1(x) = 2$

$$f_2(x_1, x_2) = \sin x_1 + \cos x_2 \implies \nabla f_2(x) = \begin{pmatrix} \cos x_1 \\ -\sin x_2 \end{pmatrix}$$

$$\implies Hf_2(x) = \begin{pmatrix} -\sin x_1 & 0 \\ 0 & -\cos x_2 \end{pmatrix}$$

$$f_3(x_1, x_2) = x_1 x_2 + \log x_1 \implies \nabla f_3(x) = \begin{pmatrix} x_2 + 1/x_1 \\ x_1 \end{pmatrix} \implies Hf_3(x) = \begin{pmatrix} -1/x_1^2 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

ヘッセ行列とテイラー展開 [p.90]

関数 f は勾配ベクトルとヘッセ行列により表現される
2次関数により近似できる

$$f(x+d) = f(x) + \nabla f(x)^T d + \frac{1}{2} d^T Hf(x) d + o(\|d\|^2)$$

関数 f の (x) における
2次のテイラー展開

$$\|d\| = \sqrt{d_1^2 + d_2^2 + \cdots + d_n^2}$$

関数 f を多項式で表現したときの
2次項までの情報を取り出した式

ヘッセ行列とテイラー展開(続き) [p.90]

$$f(x+d) = f(x) + \nabla f(x)^T d + \frac{1}{2} d^T Hf(x) d + o(\|d\|^2)$$

例1: $f_1(x) = x^2$ $\nabla f_1(x) = 2x$ $Hf_1(x) = 2$

左辺 = $f_1(x+d) = (x+d)^2$

右辺 = $x^2 + (2x)d + d^2 = (x+d)^2$

2次関数 f_1 の2次のテイラー展開は f_1 に等しい

一般に、2次関数 $f(x) = \frac{1}{2} x^T V x + c^T x + c_0$

のテイラー展開は f に等しい

V: $n \times n$ 行列
c: n 次元ベクトル
 c_0 : 定数

ヘッセ行列とテイラー展開(続き) [p.90]

例2: $f(x) = (x-2)(x-1)x(x+1)(x+2) = x^5 - 5x^3 + 4x$

$\nabla f(x) = 5x^4 - 15x^2 + 4$ $Hf(x) = 20x^3 - 30x$

$x = -1$ のとき

$x = 0$ のとき

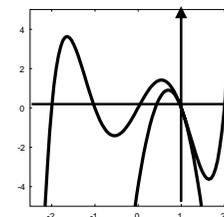
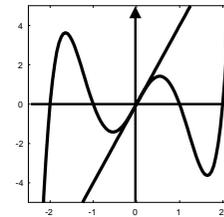
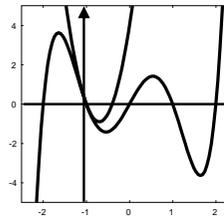
$x = 1$ のとき

テイラー展開

$0 - 6d + 5d^2$

$0 + 4d + 0d^2$

$0 - 6d - 5d^2$



行列の正定値性、半正定値性 [p.99]

正定値 (半正定値) 行列が「正 (非負)」

定義: 正方行列 A は半正定値
任意のベクトル y に対して $y^T A y \geq 0$

定義: 正方行列 A は正定値
任意の非零ベクトル y に対して $y^T A y > 0$

A が 1×1 行列のとき、
A は半正定値 $a_{11} \geq 0$, A は正定値 $a_{11} > 0$

行列の正定値性、半正定値性 [p.99]

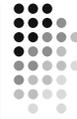
定義: 正方行列 A は半正定値
任意のベクトル y に対して $y^T A y \geq 0$

定義: 正方行列 A は正定値
任意の非零ベクトル y に対して $y^T A y > 0$

A が 2×2 行列のとき、
A は正定値 $a_{11} > 0, a_{22} > 0, a_{11}a_{22} - a_{12}^2 > 0$
A は半正定値 $a_{11} \geq 0, a_{22} \geq 0, a_{11}a_{22} - a_{12}^2 \geq 0$

$\begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & 5 \end{pmatrix}$ 正定値 $\begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & 2 \end{pmatrix}$ 半正定値 $\begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & 0 \end{pmatrix}$ 半正定値ではない

2次の最適性条件(必要条件) [p.99]

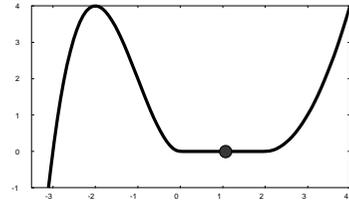


ヘッセ行列を用いた最適性条件

定理(2次の必要条件):
 x^* : 制約なし問題の極小解
 $Hf(x^*)$ は半正定値

例:
 $x^* = 1$ は極小解
 $0 \leq x \leq 2$ の範囲で $f(x) = 0$

$f(x^*) = f'(x^*) = 0$
 $Hf(x^*) = f''(x^*) = 0$
 半正定値

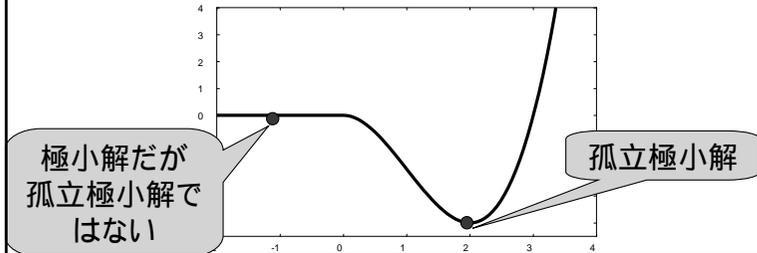


2次の最適性条件(十分条件) [p.100]

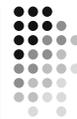


定理(2次の十分条件):
 x^* は停留点, $Hf(x^*)$ は正定値
 x^* : 制約なし問題の(孤立)極小解

定義: x^* は孤立極小解
 x^* は極小、近傍内に同じ関数値をもつ点が存在しない



2次の最適性条件(十分条件) [p.100]



定理: $Hf(x^*)$ は正定値 (孤立)極小解

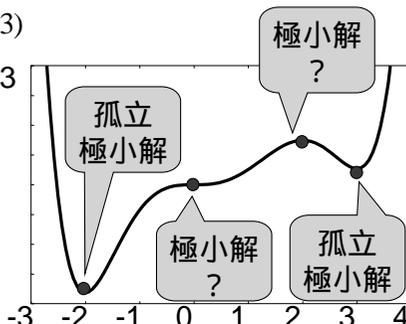
例1: $f(x) = \frac{1}{6}x^6 - \frac{3}{5}x^5 - x^4 + 4x^3$

$\nabla f(x) = (x+2)x^2(x-2)(x-3)$

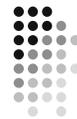
→ 停留点は $x = -2, 0, 2, 3$

$Hf(x) = 5x^4 - 12x^3$

→ $-12x^2 + 24x$
 $Hf(-2) = 80 > 0$
 $Hf(0) = 0$
 $Hf(2) = -16 < 0$
 $Hf(3) = 45 > 0$



2次の最適性条件(十分条件) [p.100]



定理: x^* は停留点, $Hf(x^*)$ は正定値
 x^* : (孤立)極小解

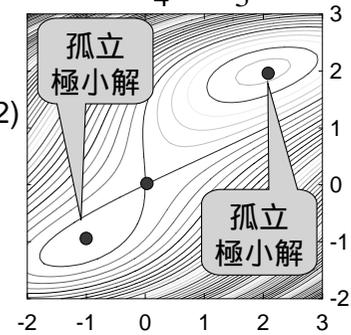
例2(教科書の例3.4): $f(x) = x_1^2 - 2x_1x_2 + \frac{1}{4}x_2^4 - \frac{1}{3}x_2^3$

$\nabla f(x) = \begin{pmatrix} 2x_1 - 2x_2 \\ x_2^3 - x_2^2 - 2x_1 \end{pmatrix}$

→ 停留点は $(0,0), (-1,-1), (2,2)$

$Hf(x) = \begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & 3x_2^2 - 2 \end{pmatrix}$

→ $(-1,-1), (2,2)$ は
 孤立極小解



極大解に関する性質



- x^* は関数 f の(孤立)極大解
 x^* は関数 $-f$ の(孤立)極小解
- x^* における関数 $-f$ のヘッセ行列は $-Hf(x)$



極大解であるための条件

定理:

x^* : 制約なし問題の極大解 $-Hf(x^*)$ は半正定値

定理:

x^* は停留点, $-Hf(x^*)$ は正定値
 x^* : 制約なし問題の(孤立)極大解

レポート問題(締め切り:1月12日)



- (1)教科書p.162, 問題3.1
- (2)関数 $f(x,y) = (x-2)^4 + (x-2y)^2$ に対して、初期点を $(0, 3)$ として最急降下法を適用せよ。
資料に添付してある等高線の図を使って
実行すればよい。
(数値を具体的に計算するのは一回目の
反復だけでよい)。